

食用カンショの在圃期間が品質収量に及ぼす影響

加勇田 誠・*梶本 明・坂本真一・村社久米夫 (宮崎県総合農業試験場・*宮崎県営農指導課)

Makoto KAYUDA, Akira KAJIMOTO, Shin-ichi SAKAMOTO and Kumeo MURAKOSO : Effects of Growing Days to External Quality and Yield on Sweetpotato Culture

宮崎県の食用カンショは、在圃期間100～120日の早掘栽培では皮色良好で带状粗皮症の発生も少なく、市場でも高く評価されているが、在圃期間が150日以上になる中晩掘栽培では带状粗皮症の発生や皮色劣化が著しく、市場評価はかなり低い。そこで中晩掘栽培における掘取適期を明らかにするため、1983～1985年の3カ年にわたり在圃期間と品質収量の関係について検討したので、結果の概要を報告する。

1. 試験方法

供試品種：ことぶき1号

在圃期間：100日、120日、140日、160日 (年次により+1～+4日)。

植付期：5月中旬～6月下旬

マルチの種類：黒色ポリマルチ } 第1表の備考欄参照
無マルチ

栽植密度：畦幅75cm, 株間30cm (444株/a)

2. 結果および考察

1) 収量 イモ個数およびイモ重は、植付期の早晚、マルチの種類にかかわらず、在圃期間が長くなるにつれ増加した。

2) 外観上の品質

①形状の整否：140日までは形状が比較的整っていたが、160日では形状の乱れがやや目立った。

②皮色：a値は在圃期間が長くなるほど小さくなり、b値は逆に大きくなった。したがってb/a値(色相)は漸次大きくなり、皮色は在圃期間が長くなるにつれて赤色味が失われ、黄色味が強くなること示された。

③带状粗皮症：全体的には、在圃期間が長くなるほど発生度が大きくなる傾向がみられた。

以上のように、外観上の品質に関与する主要な要因は在圃期間が長くなるほど劣化する傾向を示し、A品率は次第に低くなって160日では20%にも達しなかった。

また、この傾向は植付期の早晚、マルチの種類にかかわらず認められた。

3) 粗収益 収量、品質の関係から、120～140日で粗収益が多くなった。100日では品質良好であったが収量が低かったため、また160日では多収となったが著しく品質が劣ったため、粗収益はそれほど上がらなかった。

以上の結果から、中晩掘の食用カンショの掘取適期は、植付後120～140日と考えられる。

第1表 収量、品質および粗収益 (1983～1985年平均)

区別	項目	イモ個数 (個/a)	イモ重 (kg/a)	形状の整否別 構成比(重%)			測色値			带状粗皮症 発生度	品質別構成比 (重%)			粗収益 (千円/a)	同左 比率 (%)
				整	中	否	a	b	b/a		A品	B品	C品		
黒色 ポリ	100日	1,340	190	52	24	19	23.2	2.1	0.09	23	50	27	19	29.2	100
	121日	1,460	231	52	29	17	20.6	2.6	0.11	39	42	32	20	32.0	110
	141日	1,570	273	52	31	14	17.5	4.4	0.25	53	27	38	27	33.8	116
	161日	1,640	298	44	32	21	14.1	5.5	0.39	43	17	23	44	31.8	109
無 マルチ	100日	1,150	133	64	25	10	24.1	1.1	0.05	31	61	23	11	18.8	100
	120日	1,260	169	67	23	11	20.9	2.2	0.11	38	57	15	19	22.5	120
	140日	1,330	202	69	21	11	18.2	3.5	0.19	47	44	26	19	24.9	132
	160日	1,380	207	51	26	22	14.8	5.0	0.34	51	19	27	44	21.2	113

備考 1) 1983年は6月22日植えの黒色ポリと無マルチ、1984年は5月11日と6月11日植えの黒色ポリマルチ、1985年は5月21日植えの黒色ポリと無マルチで検討した。

2) 皮色はデジタル測色色差計で測定した。

3) 粗収益の算出には宮崎県産食用カンショの販売単価(1983～1985平均)を使用した。